

ARTLET  
ARTLET

慶應義塾大学アート・センター ARTLET 第58号

## FEATURE ARTICLES

アート・センター開設30周年  
——挑戦を続けて

30周年おめでとうございます

光田 ゆり

アート・センターという夢

佐藤 知久

2011、大震災後のアート・センター

内藤 正人

路上のお声がけから

糸川 麻里生

Online/Onsite——「現場」を得たアート・センター

後藤 文子

アート・センターという創造的挑戦の「現場」

渡部 葉子

## INFORMATION

活動報告



上:アート・アーカイヴ資料展I「ノードする4人—土方、瀧口、ノグチ、油井」(2006年)  
下:アート・アーカイヴ資料展XXIII「横文彦と慶應義塾II:建築のあいだをデザインする」(2022年) 写真撮影:村松 桂(株式会社カロワークス)

# アート・センター開設30周年

## ——挑戦を続けて

慶應義塾大学アート・センター(KUAC)は2023年に開設30周年を迎えます。KUACは、大学に属する研究所ですが、芸術をその活動領域として、理論的な研究だけでなく、実践活動を同時に行ってきたことがその特徴でもあります。それゆえに、常に現在の動向や問題提起を活動に反映させてきました。

設置当初は、全国の大学で初めてアート・マネジメントに取り組み、その講座は文学部大学院に着地しました。開設5年後から先駆的にアート・アーカイブの研究と実践を展開し、現在も根幹的な活動となっています。2011年には常設の展示室を得て、博物館相当施設(2013年)となり、大学ミュージアムとしての役割も果たしています。近年広く求められているミュージアムや大学を地域社会に開いていく活動も先駆けて実践してきました。

このように、30年の間に折々の問題提起を投げかけながら実施された研究や実践は、常にその時の社会や文化の状況と切り結ぶ側面を持っていました。大学のキャンパスに接しながら、その外郭に在るという地理的ポジションが象徴するように、小さいながらも外部と大学をつなぎ、応答する小窓として、これからも新しい空気を流通させる場でありたいと考えています。

西脇順三郎 [英文ノート] 1951-1955年ごろ

30周年おめでとうございます

光田 ゆり

(多摩美術大学大学院教授、  
アートアーカイブセンター所長)

TEXT: MITSUDA, Yuri

慶應義塾大学アート・センター(KUAC)が30周年を迎えるとのこと、おめでとうございます。長い間お世話になってきた一人として、感慨を感じます。

貴センターが三田キャンパスの一角に誕生したころ、美術館でもギャラリーでもない大学内のアート・センターとはいかなる施設なのか、当時美術館学芸員だった自分には明確なイメージはなかったと記憶します。土方異の一次資料を集積した土方異アーカイブが同センターに所蔵され、展示活動やイベントの開催が始まった(2000年)時は、その鮮やかな活動に目を開かれました。それまでも多数の貴重な美術作品を含む土方異の展覧会は開かれていたのですが、身体の芸術である舞踏という領域を、資料という名の物体たちによって語り直すことを基本に据えた、同アーカイブの設立は新鮮に感じられました。しかも慶應義塾大学と土方という特段にゆかりのない組み合わせも意外に思われました。

以後、KUACの活動自体が、大学におけるアーカイブセンターとはどんな施設なのか、それを具体

的に示していくフロントランナーとなられたと思っています。土方アーカイブに加えて、同校卒の瀧口修造のアーカイブでは、わたし自身、閲覧や借用もさせていただき、とてもお世話になりました。瀧口の蔵書は多摩美術大学の図書館(現アートアーカイブセンター蔵)に、所蔵していた美術品やオブジェなどのコレクションは富山県立美術館に寄贈されていたのち、最後まで綾子夫人のお手元にあった「資料」がKUACに所蔵されました。「書籍」とか「美術作品」のような既存分野ではなく、「資料」、それが大切だったのです。「資料」は、名前やタイト

ルのつけようのない、多様なものたちを包みこむ豊かな分野です。既存ジャンルを越境した活動の場合は特にそうなると思うのですが、表現者の仕事からより深く何かを読み取ろうとする時、「資料」にこそ重要な肉声、研究の鍵がひそめられていることは間違いのないでしょう。瀧口の初めての欧州旅行を資料で採りあげた大著『瀧口修造1958 旅する眼差し』(慶應義塾大学出版会、2009年)の豪華さとはびぬけていました。瀧口のメモ・ノート、ポストカードなどの精緻な再現、いえ再制作というべきでしょうか、その精度はマルセル・デュシャンの『グリー



『瀧口修造1958 旅する眼差し』(慶應義塾大学出版会、2009年)の展開写真

ン・ボックス』を彷彿とさせる偉業でした。

各美術館にも豊富な資料が保管されていますが、資料公開が施設の目的になっていないため、外部の研究者が閲覧させてもらうには一般的に高いハードルがあります。その点KUACの姿勢は、資料整理は完了していなくとも学外にも閲覧も貸出も対応する、というとてもありがたいものです。わたしたちの施設も学ぶべきだと思いつつ、完全にオープンにするには至らず、なかなか果たせるまでに時間がかかりそうです。

継続的な資料紹介展とその図録、各回にテーマ

を掲げてユニークな造本にも工夫のあるブックレットの発行、重厚な年報／紀要、このレターなどの出版物、イベントの動画記録など、KUACの活動が積み上げて来られた成果に、敬意を表します。30年を迎えて、それらを振り返れば、何よりの説得力が生まれます。

シンポジウムや展覧会にも、わたしは何度も拝見させていただきました。正攻法にかえてユニークなアプローチを採る例が増えつつあると感じるのは私見に過ぎませんが、従来のには「資料展示」といえば地味な印象になるところ、工夫が感じられます。

KUACはアート・センターなので、所蔵アーカイブの紹介だけでなく、所蔵品を離れた企画がコンスタントに続けられています。国内外の現代美術企画で、近年ではダニエル・ビュレン、アナ・メンディエタ、ハンネ・ダルボーフェン、河口龍夫などが記憶に新しいところで、現代美術ギャラリーとしての活動にも華があります。

これからもKUACの道を開いていく活動に学ばせていただきます。



## アート・センターという夢

佐藤 知久

(京都市立芸術大学芸術資源研究センター教授)

TEXT: SATO, Tomohisa

慶應義塾大学アート・センター(KUAC)について私が初めて耳にしたのは、1993年か94年ごろだったと思う。

そのころ京都の大学院生だった私は、美術家の小山田徹さん(現・京都市立芸術大学教授)らとWeekend Caféという非営利の「喫茶店」をやりつつ、その少し前に小山田さんや故・遠藤寿美子さん(アートスペース無門館代表)たち有志が京都大学のそばの小さな一軒家を借りて開いた、「アートスケープ」という名の、草の根の「アート・センター」に頻繁に出入りしていた。アートスケープは、世界各地で小山田さんが経験したアート・センター的な場所をモデルに、京都にも同じような場所が必要だと考えてつくられた場所だった。だからそれを大学に設立する慶應は、なんて先進的なのだろうと思っていた。

あらためて述べるなら「アート・センター」とは、

美術館でもギャラリーでもない、アトリエでもシアターでも、大学でも研究所でもない—そして、これらの要素を全て部分的に備えている一場所である。アーティストが(そしてそうでない人も)出入りし、分け隔てなくさまざまなことを語りあう、フラットで開かれた共同空間。作ることと見ることと対話することが並行して生じ、作る側と見る側の反転をふくめた、さまざまなことが起きる。そこから芸術が生まれてくる。それが(少なくとも私が当時ぼんやりとイメージしていた)アート・センターだ。

それから30年近くが経ち、私は2017年から京都市立芸術大学・芸術資源研究センター(芸資研)で働いている。公式に明言してはいないが、ここは「アーカイブ」を鍵概念とし、大学を基盤にしつつ大学内外の利用者に対して開かれた「アート・センター」だと思っている(創設に関わった建島哲さんは、芸資研を梁山泊のような場所にしたい、と語っていたという)。垂直的な組織の中に現れる、領域横断的な、そこから芸術が生まれてくる共有空間。

なぜ「アーカイブ」なのかについては、さまざまな意見がありうる。だが、少なくともそのアイデアが、自由な集合体／コミュニティ・センター／NPO／企業体による運営／アート・プロジェクトといった、過去30年ほどに及ぶ、アート・センター的なものをめぐる私たちのさまざまな「試行」を踏まえて生まれたことは、確かであろう。人や活動や組織の

形態が変わっても、その記録や記憶や痕跡をそこに残すことで、それが次の創造を促す「土壌＝COMPOST」になる。そのことを意図して「アーカイブ」という装置を作る。「アーカイブ」は、アート・センターに関わる人たちの芸術的実践を促す芸術資源、また、組織や領域の壁を越えて人びとが交差するための一種の誘因なのである。

そして言うまでもなく、こうした考え方は、KUACがその設立から30年かけてたどった足跡、なかでも「ジェネティック・アーカイヴ・エンジン」というコンセプトに連なるものだ。

芸資研に転職してから、KUACの渡部葉子さんや本間友さんたちと出会い、本当に多くのことを教えていただいた。アート・アーカイブを扱う機関としてすでに確固たる実験と実績を重ねてきたKUACから、芸資研は今も、多くのことを学ばせていただいている。そして私はかねがね(組織の規模も実績も人員の豊かさも比較にならず、全くおこがましいかぎりであるが)、KUACの方たちのことを、勝手に「同志」だと思ってきた。それは芸術とアーカイブという同じ領域で働く者としてだけでなく、私たちが30年前に抱いていた夢が、今もそこに共鳴していると感じているからである。

感謝をこめて。開設30周年、おめでとうございます。



慶應義塾大学アート・センター収蔵庫(2017年)



アーカイブ作業(2009年 慶應義塾大学アート・センター 西別館)



土方アーカイブの調査に訪れる海外からのリサーチャー(西別館時代)



寄贈者 新倉俊一氏宅での西脇資料集荷(2010年7月28日)



まさに激震、だろうか。あるいは、クラッシュアンドビルド、なのか。

設立時の関係者のただならぬ情熱やそこに投じられた膨大なエネルギーには敬意を表するほかはないものの、大学に設置される歴史の浅い研究所というのは、往々にして非常に存立の基盤が脆い。その最たるものが財政面であり、私が五代目のアート・センター所長を引き受けた前後はそこがもっとも困難な時期であった。なぜなら、それまでアート・センターが長期間にわたりその多くを依存してきた大型の外部助成が終結し、その後継予算については目途が立たず、何らの準備もなされていなかったからである。ちょうど我々の日常が不意を突かれたあの3.11の大震災を経験したころの、偽らざる状況だった。

1993年の開設以降、先人たちのご尽力で営々と積み上げられたアーカイブ等の諸活動や関連人員のダウンサイズが、なかば当然であるかのように冷たく口にされたとき、私の中のスイッチは入った。「そのようなシナリオは、用意しない。」敗退、縮小

などという選択肢を排除し、これまでのすべてを維持、さらに展開していくためには、いったいどうすればよいのか。高邁な理想をお題目のように唱え、「研究」の美名を旗印にその意味や意義を声高に謳い上げ続けるだけでは、もはや不可能であった。そもそも大学において、研究とは各人それぞれがやって当たり前、なのである。

普及と教育。この二つの活動に従来以上の力点を置くという新たな方針について、幸いにも多くの所員の皆さんのご理解とご協力を得られたことで、アート・センターは再出発した。その実質的な中身とは、大学管財部からの委託によりささやかな新展示室の運営を主体的に手懸けること、そしてもうひとつは、競争的外部資金の積極的な獲得による諸事業及び研究活動の推進、である。学校教育の場である大学が、広く社会に開かれた教育普及の場である博物館を設置、運営する、というのは他の学校法人には例が多いものの、創立百年を優に超える古参私学の我が校では、実は初の試みであった。さらにまた、自分たちから大小さまざまな活動資金を官民へ積極的に取りに討って出る、というハードなタスクも、改めて自らの組織に課すことになったのである。そしてこれらの要素を旧来と異なるレベルで展開するために、本来戦後芸術の研究所としてスタートしたアート・センターの守備領域をいくぶん拡張することもまた、必要にして不可欠となった。つまりこれこそが、「このまま座して死を待つだけでは未来はやって来ない」、とまで実際に言い渡された私たちの、覚悟であった。

そこからすでに10年と少々。果たして我々組織の進路には今後、いったい何が待っているのだろうか。いや、とうに型落ちの古いヴァージョンでしかない我々自身の役割などほどなくして終わり、次なるもつと若くて活発で、熱量の高いマグマを内包した世代へと舵取りを任せるのであるから、この場に至ってなお、訳知り顔にて何かを語ることは烏滯がましい。荒天の下、逆巻く波涛のなかを突き進む航海の大変さも正直脳裏に浮かびはするけれども、しかしながら賢明な若手たちは熟考の上、きっと新たな進路をしっかりと見定め、その時々活動の糧となるあらゆる種類の燃料を投下しつつ、着実に航海を続けてくれるのだと思っている。象牙の塔にろうじて残るほぼ廃墟と化した貴き研究所、などというあり得べからざる幻影ではなく、今現在も実に様々な接点からアート・センターの活動に熱視線を送り、あるいは支えてくれる数多くの内外の人々が望む現実的な未来の像として、これは単なる願望ではなく、確かな予測であると信じている。

アート、という言葉そのものが、狭義の美術や芸術を意味するのみならず、広い意味での人文学そのものを代弁する、ということの意味を改めてここに噛みしめつつ、設立30年という節目の年にあたり、アート・センターの近過去を率直に回顧すること、さらには将来のため、あえて赤裸々で不調法に書き置くことを、最後にお許し願えるならば幸いである。

## 路上のお声がけから

糸川 麻里生

(アート・センター副所長、文学部教授)

TEXT: KUMEKAWA, Mario

私がアート・センターの所員になったのは、2007年の秋だった。もう15年もアート・センターのスタッフをしている。そのうち10年以上は副所長としてだ。所員になった当時は、まさかこんなに長く、こんなに深くアート・センターにかかわらせていただくとは思ってもいなかった。アート・センターといえば、「時々キャンパス内にオブジェを置いていく、変な人たち」くらいの認識しかない私であった。

声をかけてくださったのは、当時アート・センター所長をしておられた鷺見洋一先生(文学部仏文学専攻教授)だ。三田の研究室棟の前で、鷺見先生に話しかけられた。

「糸川さんさあ、ジャズ好きだったよねえ。ちょっと手伝ってこないかなあ」

鷺見先生は、私が独文専攻の学部生の頃、すでに仏文の先生だった。ろくすっぽ授業にも出ないで、仲間とピヤホールで演奏しては立て続けに留年しているダメな学生のことを、覚えていてくださったらしい。

「油井正一さん、知ってるでしょ？ 油井さんが亡くなって、ご遺族の方が油井さんの資料をどかっと慶應に預けてくれたわけ。それをね、どうにかしてアーカイヴ化したいんだけど、それを手伝ってもらえないかね？」

当時、アート・センターは所長が鷺見先生、副所長が美学美術史の前田富士男先生だった。ゲーテを研究しようとしていた私にとって、デイドロ研究とパウル・クレー研究の大家である両先生は崇敬と憧れの存在だ。

「承知いたしました」

ということで、私はアート・センター所員になった。アート・センターは慶應義塾内では新参ながら「研究所」である。しかし、その研究所で私がしていたことといえば、故油井正一氏の遺した手帳やノート、雑記類の形状や特徴をExcelの表に黙々と打ち込ん

でいくことだった。「本業(のつもり)」の文学研究をはじめ、他にいくらでもやらなければならないことはあるのに、週に1、2回アート・センターに来て作業するのは、正直気が重い作業だった。しかし、大教授の鷺見先生も当時西別館にあったアート・センターの片隅に腰掛けて、黙々とExcelを打ち込んでいるから、仕方がない。当時アート・センターの若手スタッフだった本間友さんや上崎千さん、それにパートタイムで作業に来てくれる方たちのお力添えもあって、少しずつ「油井アーカイヴ」はそれなりに形をなしてゆき、2011年にはとりあえず外部の方々に閲覧していただける体勢をとった。それとともに、私は「アーカイヴ」というものが学知の世界の中で持っている、予想以上に大きな意味も理解し始めていた。18世紀フランスの百科全書派を研究する大先生の鷺見先生が、なぜその貴重な時間を割いて、ぼつりぼつりと資料リストを作成しているのかも……。

いくらジャズ評論の大御所・油井正一氏が遺したものだからといって、それだけでは学知も歴史も生み出すことはない。それらの、まだ何物でもない「ブツ」が、成立年代や出自を特定され、保証され、特定の秩序の中に置かれ、検索可能なものになった時、それは「資料」となって、学知と歴史の揺るぎない証拠となる。アーカイヴ作りこそは、神による天地創造の模倣なのである。デイドロやダランペールが百科全書に込めようとした、根源的な知への欲求は、アーカイヴという装置によってこそ真に満たされうるのかも知れなかった。

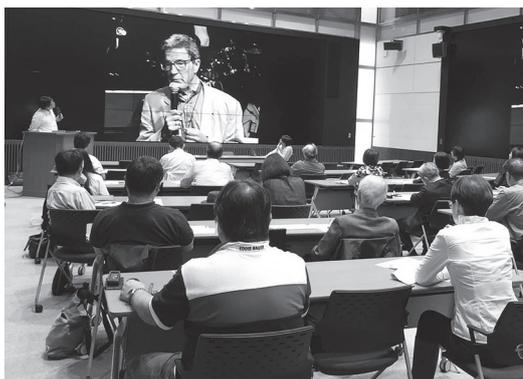
アカデミックな世界での「業績」は、もとより論文によって決まる。「○○アーカイヴを作りました」などと言っても、オフィシャルな業績には全くならない。研究者として高い評価を受けたいなら、アーカイヴ構築などに関わっていないで、一本でも多くまとめた論文を書いた方が効率ははるかに良い。しかし私は、アーカイヴという、知の最も川上の地点に立つ興奮を知ってしまった。持ち主がいなくなった、もう使い道がなくなった、言うなれば「ゴミ」たちが、知識と歴史の根源という玉座に上り詰める文字通りの「革命」を、現代においても可能にするのがアーカイヴ、とりわけアート・アーカイヴという装置なのだ。政府系の公文書館によるオフィシャルな官製の歴史に対して、在野の手作りのアーカイヴが大学にあることで、歴者や学知に望ましい多層性が生まれてくる。全国津々浦々に、さまざまな種

類のアーカイヴができるようになれば、一度はひどく中央集権化された日本の歴史が解きほぐれていって、地方発・地域発の歴史や文化がさきわう日本社会が生まれ出てくるかもしれない。

私は、スタッフの方たちと、アート・センター内に「アーカイヴの思想研究会(現・アーカイヴの形態学研究会)」を立ち上げ、読書会をしながら、このアーカイヴというものが思想的、文化的、政治的に何を成しうるのかを話し合うようになった。そして、ますます「ポピュラー音楽のアーカイヴ」というものの重大な意味と可能性を感じるようになっていった。ジャズひいてはポピュラー音楽という文化の歴史は、きわめて多くの人々の心を動かし、楽しませ、しばしば世の中を動かすものでさえあるのに、正史のようなものは近年ようやく書かれ始めたばかりだし、ポピュラー音楽の研究所も学科も大学には(私の知る限りでは)日本には存在しない。それだけに、このジャンルの資料をしっかりと整備し、将来の研究に供することは、わが国そして世界の将来にとって重要なパイオニアの仕事なのだ。

油井正一アーカイヴには、そうしたポピュラー音楽研究の意義を感じてくださる、多くの方々がご協力くださるようになっていった。油井氏の弟子筋に当たる音楽評論家中川ヨウ氏は、定期的に勉強会やレクチャー・コンサートの講師を引き受けてくださった。故副島輝人、故相倉久人氏のご遺族からは、貴重な資料を寄託・寄贈いただいた。なにより、大野雄二氏や村井邦彦氏、湯浅譲二氏、佐藤允彦氏、神保彰氏、林正樹氏、島裕介氏、伊藤志宏氏といった塾員のミュージシャンの方々には、レクチャー・コンサートや講演会を開いていただいた。他にも、菊地成孔氏、大谷能生氏、Zebra氏、宮沢和史氏、牧村憲一氏、藤井丈司氏、原田悦志氏、山崎あおい氏といった錚々たる音楽家やプロデューサーの方たちにも訪問所員になっていただいている。故副島勲氏のご遺族からも、資料提供はじめ、多くのご協力をいただいた。

鷺見先生に呼び止められた立ち話が、こんなところまで来てしまった。しかし、「加山雄三論」や「村井邦彦論」でPhD論文を書く研究者がまだまだ存在しないとすれば、日本の文化と学術の欠落というべきだろう。そういったことが当たり前になる新時代が拓かれるまで、アート・センターにはまだまだ踏ん張っていただきたい。



「拡張するジャズ」公開研究会の様子(2018年)



佐藤允彦氏(右)、林正樹氏(左)、中川ヨウ氏(中央)によるレクチャー・コンサート(2019年)



Fig. 1 ZKM起工式におけるハインリヒ・クロッツ、1993年  
(© ZKM | Karlsruhe, photo: Evi Künstle)



Fig. 2 ZKMが草創期の活動拠点とした元武器・弾薬工場(© Stadtarchiv Karlsruhe)



Fig. 3 「痲瘡譚～生んだもとの生命からすでに切りはなされてあるを」展会場風景 2022年7月



Online/Onsite

—「現場」を得たアート・センター

後藤 文子

(アート・センター副所長、文学部教授)

TEXT: GOTO, Fumiko

1993年——慶應義塾大学アート・センター(以下、KUACと略す)が開設された当時、オンラインで何かをするという経験は皆無だった。パソコンもスマートフォンもなかったのだから、当然、ウェブ検索もZoomミーティングも、E-Mailも、ましてやSNSもまったく未知で、デジタル・ツールを使いこなす日常など想像したことすらなかった。けれどそうした時代から30年経ち、デジタル環境が当たり前になったいま少し俯瞰的に当時を振り返ってみると、実際にはすでにアートの領域でも鋭敏に、そして知的にデジタルな新時代を手繰り寄せる企ては世界各地で動き出していた。

なかでも重要な一つ、KUAC開設に先立つことわずかに4年、1989年にドイツ、カールスルーエで美術史・建築史家ハインリヒ・クロッツ(Heinrich Klotz, 1935-1999)が牽引して始動した公立のアート&メディアテクノロジー・センター(Zentrum für Kunst und Medientechnologie Karlsruhe: 以下、ZKMと略す)は、到来するデジタル時代をユニークな仕方で見据えていた。それは、20世紀初頭の実験的デザイン・プロジェクトを引き合いに出して「エレクトロニック・デジタル・バウハウス」を掲げ、古典的な諸芸術と新しいメディアテクノロジーを融合

させることで、かつてない芸術創造と体験、そして研究のための場の創出を模索し始めていたのである。

興味深いのは、最先端で時代を切り拓いた彼らの知的で創造的な活動が今日に至るまで、かならずしもデジタル主義一辺倒ではなく、むしろデジタルな「オンライン(Online)」を実体的な「オンサイト(Onsite)」の相関と捉え、それら相互の双方向的コミュニケーションが追求されてきた点である。デジタル世界ではさまざまな機能が抽象的で「不可視な」特性を極めるのに対して、本質的に実体的で「感覚的な」存在であるアートにとって、それが成立する「現場(Onsite)」を問わざるを得ないのは自明でもある。だからZKMがその草創期の活動拠点を、あの途轍もない広さ(L312m×W56.4m×H25.8m)を有する産業遺産、すなわち第一次世界大戦期の建造になる巨大鉄骨製武器・弾薬工場の廃墟に定めたのは、一見、最先端のデジタル問題と不釣り合いのようではあるが、実は決してそうではない(Fig. 1, 2)。ひとたび足を踏み入れようにもあまりに威圧的なそのファサードからして近寄る覚悟がいったあの場所において、ある時は最新のメディアテクノロジーを駆使したインスタレーションの、またある時は生身の人間によるモダン・ダンスやコンサートの「現場」を果敢に創出した営みは、今思い返しても明確な理念に裏打ちされていたとわかる。

さて、アート・センターの歩みはまさにそうした時代の動向と重なり合っている。あえてこう捉えてみると、デジタルな「オンライン(Online)」化が推し進められた時代であればこそ、KUACがその歩みの過程で固有の「現場(Onsite)」を得たことにはきわめて大きな意義があるように思えて仕方がない。そ

う、2011年9月に大学三田キャンパス正門の、道を挟んでちょうどその向かいに建つ南別館1階に開設されたアート・センターの展示室(以下KUAS)である。オープンから10数年経ち、この間に開催された展覧会はすでに60本を超えている。KUASの展覧会活動がそのまま大学附属研究センターとしてのKUACの特性と関心を如実に映し出す鏡だとすれば、重要なのは次の点であるに違いない。すなわち、60本を超える展覧会企画を一瞥しても明らかのように、絵画、彫刻、建築などいわゆる空間芸術と、音楽、舞踏、映像といった時間芸術の多様な表現が入れ替わり交差し合い、10年という年月をかけて少しずつ積層するかのように創出してきた場こそが、「現場」としてのKUASにほかならないという視点である(Fig. 3)。いずれの表現もKUACが1993年の設立期から継続的に、とりわけ多角的なアーカイブ活動を基盤として向き合ってきたアート領域にほかならない。

今日、KUACのアーカイブ活動は国内外の研究者に広く周知され、彼らの研究活動に対して拓かれ、日々更新される「オンライン」世界でも情報発信されている。まさにKUACは、KUASという「現場」を得たことで、それ以降、基幹としてのアーカイブ活動を「オンライン/オンサイト」の双方向的コミュニケーションという新たなフェーズへと展開させてきたとも言えるに違いない。

図版出典

Fig. 1 ZKMホームページより <https://zkm.de/en/about-us/history/founder-heinrich-klotz> (最終閲覧日: 2023年2月17日)

Fig. 2 ZKMホームページより <https://zkm.de/de/ueber-das-zkm/entstehung-philosophie/architektur> (最終閲覧日: 2023年2月17日)

Fig. 3 KUAC公式facebookより <https://www.facebook.com/keio.artcenter> (最終閲覧日: 2023年2月17日)

## アート・センターという 創造的挑戦の「現場」

渡部 葉子

(アート・センター教授/キュレーター、  
ミュージアム・コモンズ副機構長)

TEXT: WATANABE, Yohko

昨年、珍しく学内の研究所が一同に集められる機会があった。その際、各研究所の活動内容を簡単に説明紹介した資料が配布されたのだが、それがアート・センターの現状とはかなりかけ離れたものになっていた。説明資料を作ってくれた部署に聞いたところ、基本的に設立当初の説明を用いたという。それを聞いて、なるほどと思った。アート・センターはこの30年の間にその活動をさまざまに展開してきたので、大きなズレを生んだのである。一方、大学における研究所というはある研究範疇や対象領域に対して安定して研究を継続することを基本とするということを改めて知らされた思いもあった。その意味で、アート・センターは変わり種の研究所と言ってよいだろう。

現在は活動の根幹を成しているアーカイヴ活動や展示施設運営は設立当初は想定されていなかった。

た。しかし、だからと言って、設立時の発想から外れてしまっているかという、そうではない。現在もホームページに掲げられている概要にある説明を体現していると言えるのだ。「本センターは特定分野や思想、理論体系にかたよることなく、総合大学の特徴を活かした領域横断性、すなわちさまざまな学問分野の成果を総合する立場から、現代社会における芸術活動の役割をテーマに、理論研究と実践活動をひろく展開して」いるのである。ここで重要なのは理論研究と実践活動の双方を行っていることである。

アーカイヴについても、実際のアーカイヴの構築を行うと同時に常に理論的な研究も併走しており、講座を設置して教育活動にも展開してきた。また、展示活動とも密接に連携して、発信にも努めている。2002年に発足して20年余り事務局として携わってきた美術品管理運用委員会では、作品の保存管理という堅実な活動を担うとともに、昨年にはその成果を生かしながら「我に触れよ (Tangite me) : コロナ時代に修復を考える」展を実施し、コロナ下において修復と接触の問題を問うた。このように、領域横断的な理論研究に取り組みながら、実践活動を併走させ、そこから更なる思考の展開に挑むという歩みの中で、アート・センターの活動全体が大きな生き物のように動いて来たと言ってよいかもしれ

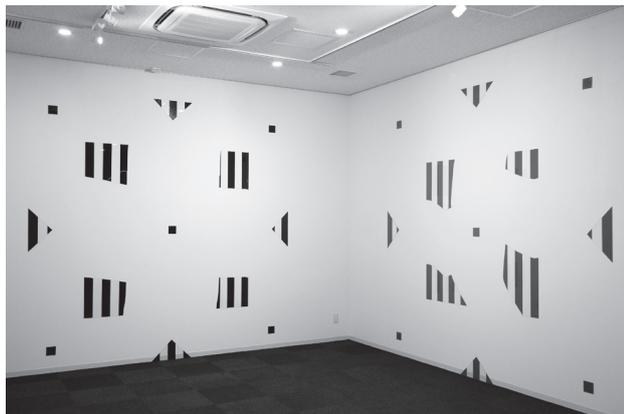
ない。その動きを可能にしているのは、常に半歩、一歩、歩み出ようとする挑戦的精神である。決して恵まれているとはいえない環境や条件の中で、手にしたものを、その活動をクリエイティブに展開しようとポジティブに動くこと、それが、これまでの活動を支えて来たと言ってよいだろう。アート・センターはいわば、走りながら考える場である(ある意味では、資金や人事の不安定さから、走り続けることを余儀なくされている側面があることも否めないが……)。どの活動にも実践的な「現場」が伴う。アーカイヴが構築され、展示が実施され、イベントが開催される。それらは相互に関連しながら、現代社会における芸術の問題提起につながっていくであろう。

そして、実践的な「現場」であるからこそ、そこでは組織の、活動の、オープンな在り方が重要でもある。様々な立場や環境に属する人々が集い、協力してくれることによって、アート・センターは成り立っている。さらに、そのような開かれた在り方が、常に社会の現状や芸術の現在的な課題に目を向け、先駆的な活動を展開することを可能にしても来ただろう。

小さいながらも、領域横断的な交流の場として、面白い出会いが創出され、行き会う場として、これからは創造的で、オープンで、そして、何より挑戦し続ける、そんな変わり種の研究所であり続けたい。



Artist in Campus 大竹伸朗 ワークショップ「スクラップ」(2007年)



「同時代の眼 II 此処から—ブラウンとビュレン」展(2012年) 写真撮影: 村松 桂(株式会社カロワークス)



《牧童》(志木高等学校)の保存修復作業(2009年)



「我に触れよ (Tangite me) : コロナ時代に修復を考える」展(2021年)

## 活動報告

## ■展覧会

**アート・アーカイブ資料展XXIII 横文彦と慶應義塾II：建築のあいだをデザインする** 2022年10月3日(月)~12月16日(金)  
慶應義塾が有する横文彦の建築の展覧会の第2回として、横文彦の代表作でもある湘南藤沢キャンパス(SFC)を取り扱った。「群造形」を展覧会全体を通じたテーマとし、さらに「視線と風景」「オープン・スペース」「都市と田園」というキーワードを用いてSFCに込められた横のコンセプトを紹介した。それぞれキーワードに関連するものを緩やかに分類しながらその写真を展示室の壁に展示、またそれぞれに最も関連する建築物の図面も展示することで、どのような空間が現出しているのかを想像してもらえようとした。また、空間をより体験的に感じてもらうため、写真や図面だけでなく動画を複数用意した。SFCに特徴的なループ道路や、横が特にこだわった景観などを、写真とはまた異なる体験として来場者に届けることができたのではないだろうか。本展が各種授業で取り上げられたことも、これまでの展覧会と比較して特筆すべき点であろう。アート・センターのスタッフが講師を務める慶應義塾の授業で来場した学生に対して説明や質疑応答を複数回行ったほか、SFCに設置された横文彦建築に関する寄附講座では展覧会企画者が授業で直接解説や討論を行った。また他大学の授業で取り上げられることもあり、慶應義塾内に止まらない、幅広い教育機会を提供したと言える。

**アート・アーカイブ資料展XXIV 西脇順三郎没後40年記念展「フローラの旅」** 2023年1月16日(月)~3月17日(金)  
2010年に新倉俊一氏(元明治学院大学名誉教授、英文学研究者)から西脇資料を受贈し、2012年にはアート・アーカイブの西脇順三郎コレクションが開設された。2022年、没後40年を迎えた西脇順三郎を記念し、アーカイブの資料を中心に10年ぶりの展覧会を開催した。本展では、詩人の杉本徹氏が以前執筆された「フローラの詩学」(『Booklet21 光源体としての西脇順三郎』 2013年)をもとに「散歩」と「フローラ」という2つのキーワードを設定して、西脇の詩世界を紹介した。ときとして難解である、学術的であるとも評されてきた西脇の詩は、現代人にも身近な「散歩」や、歩く道すがら目にした「野草」などの要素がふんだんに詩に取り入れられており、その点にフォーカスして親しみやすい西脇順三郎像を描き出す試みをした。西脇が散歩をする動画(飯田善國撮影)、西脇が自作した「押し花帳」全ページのスライドショー映像、詩人や研究者による西脇詩篇の朗読音声など、自筆原稿やノート類以外の媒体も用いてパリエティをもたせた展示になるよう工夫をした。文学系の展示でよく見られる解説パネルは極力省き、視覚や聴覚など身体感覚で詩を感じてもらいたいとの考えからである。また今回はインクルーシブ鑑賞として障害のある人もない人も一緒に鑑賞するワークショップを2回実施した。本展は公益財団法人花王芸術・科学財団の助成を得て開催した。

## ■催事

**2022年度新入生歓迎行事 笠井敬博ストリートダンス公演「今、ショパンを踊る」** 2022年10月19日(水) 日吉キャンパス 来往舎イベントテラス  
萩原翔太郎と詩の未来 2022年10月22日(土) 三田キャンパス 北館ホール  
**ART WEEK TOKYO ROUND TABLE「Curatorial Vision(s)」** 2022年11月4日(金) 三田キャンパス 旧ノグチ・ルーム  
**第2回富田勲シンポジウム 初音ミクと『イーハートヴ交響曲』** 2022年12月2日(金) 三田キャンパス 東館6F・G-Lab  
**瀧口修造研究会特別例会 パビエプリエ 00：交信紙——岡崎和郎の矢印について**  
2022年12月10日(土) 三田キャンパス 東館6F・G-Lab  
**牧村憲一アーカイブ 第1回シンポジウム「加藤和彦と大貫妙子 ふたつの『ヨーロッパ三部作』」**  
2022年12月11日(日) 三田キャンパス 北館ホール  
**慶應義塾大学エンターテインメント三講座合同シンポジウム エンタメ学宣言!ゲーム・音楽・アニメから展望する研究・教育の現在と未来**  
2022年12月17日(土) 三田キャンパス 東館6F・G-Lab  
**没後37年 土方巽を語ること XII** 2023年1月21日(土) 三田キャンパス 東館6F・G-Lab  
**アムバルワリア祭XII 西脇順三郎と女性性—左川ちかを思い出しながら** 2023年1月28日(土) 三田キャンパス 北館ホール

■プロジェクト(文化庁、港区助成事業。今年度の関連催事は下記の通り。)

【令和4年度文化庁 メディア芸術アーカイブ推進支援事業】

- ・ステラーク×VIC(ビデオインフォメーションセンター)：モデュレート/メディアイト(1970年代パフォーマンス記録上映&アーティストトーク) 2022年10月29日(土)
- ・マイ・ライブ勉強会 2023年1月22日(日)

【令和4年度文化庁 Innovate MUSEUM事業】

- ・地域の文化を読み解くラーニング・ワークショップ「コレクティブ・メモリー2」 2022年11月16日(水)、12月7日(水)、12月21日(水)
- ・慶應義塾の建築プロジェクト 慶應義塾三田キャンパス 建築プロムナード——建築特別公開日 2022年11月28日(月)~11月30日(水)
- ・日常の風景の中に文化財を観る：地域の彫刻と建築を学ぶワークショップ 2023年1月20日(金)、1月30日(月)
- ・文化財への新しいアプローチに触れる1 dayプログラム：「オブジェクト・ベースト・ラーニング」入門 2023年1月25日(水)
- ・東京海洋大学マリンサイエンスミュージアム：目の見える人と見えない人のまっすぐ&ぶらぶら対話ツアー 2023年2月4日(土)
- ・インクルーシブを語る会：歴史文化あふれる増上寺とともに考える 2023年2月16日(木)
- ・寺院の文化と現代における活動を学ぶ見学会「泉岳寺を訪ねる」 2023年3月10日(金)

【令和4年度港区 MINATOシティプロモーションクルー認定事業】

- ・「アートナイトを語る」ワークショップ 対話で紐解くアートの魔法ARTLK Trekking 2022年9月15日(木)~11月12日(土)

## ■研究会

## 西脇順三郎研究会

いまだ新型コロナウイルス感染症拡大の影響下、制限を余儀なくされていたが、予防安全対策を施した上で2022年9月に第56回(杉本徹氏)、12月に第57回(久村亮介氏)、2023年2月に第58回の研究会を開催した。同研究会は、詩人、研究者、翻訳家、現役大学院生等をメンバーに有し、毎回担当者がテーマを設定して発表を行い、各メンバーとの議論を深める形式をとっている。多角的な切り口をもって、西脇順三郎の詩、詩論等を分析対象とすることで、西脇の詩世界の深奥を探索することを目的として活動し、各回の音声記録もアーカイブしている。本年度は西脇順三郎没後40年にあたり、西脇順三郎資料を展示する機会にめぐまれた。西脇研究会の杉本徹氏をはじめ、メンバーの方々のご協力を得て、詩の朗読音声を展示室で流すことができ感謝している。

## 研究会mandala musica

“油井正一アーカイブ”公開Jazz研究会「拡張するジャズ」では、今年度も様々なゲストに登壇していただき、開催することができた。2022.10.1以降に開催したは催事は下記の通りである。

- ・「平野啓一郎×中川ヨウ 音楽と分人」 2022年11月17日(木) 三田キャンパス 北館ホール
- ・第一興商/日本音楽健康協会presents慶應義塾大学アート・センター「油井正一アーカイブ」公開Jazz研究会「拡張するジャズ」湯川れい子 続・音楽のチカラ 2022年12月16日(金) 三田キャンパス 南校舎ホール(録音)

## アーカイブの形態学研究会

昨年に引き続き、読書会をオンラインで行った。ブルーノ・ラトゥール『社会的なものを組み直す』を議論しながら少しずつ読み進めている。

## 瀧口修造研究会

アート・センター・アーカイブの「瀧口修造コレクション」が行ってきた研究活動をさらに活性化し、その継続的かつ創造的な核となることを目的として、2021年6月に設立された。瀧口の戦前戦後を通じた領域横断的なアクチュアリティをいかにして現在に接続するか—これが当面の研究会のテーマである。メンバーは義塾の内外から集まった研究者とクリエイターで構成され、ゲストが参加することもある。基本的に月1回行われる例会の様子は研究会の機関誌『マージナリア・ジャーナル』に報告されている。アート・センターのWebサイトからご覧いただければ幸いです。

## ポートフォリオBUTOH

2022年12月17日(土)~18日(日)ケンブリッジ大学にて開催された国際会議「The Social World of Butoh Dance: Screening an Unseen Performance from the 1970s」を企画した。Video Information Centerコレクションより、北方舞踏派の結成記念公演「塩首」の上映会を行った。通常アート・センターでしか閲覧できない資料をイギリスにて全編上演する貴重な機会となった。また、海外の舞踏研究者たちと討議も行った。

■展覧会 今後の開催予定(※タイトルおよび会期は変更される可能性があります。)

アート・アーカイブ資料展XXV 「田邊コレクション」 2023年5月22日(月)~7月28日(金)

Artist Voicell:「駒井哲郎」 2023年10月10日(火)~2024年1月26日(金)

ARTLET 第58号

発行日：2023年3月31日

編集：内藤正人

桑川麻里生

後藤文字

渡部葉子

小菅隼人

徳永聡子

小島与志生

制作：図録社

発行：慶應義塾大学アート・センター

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

TEL：03-5427-1621(直通)

FAX：03-5427-1620

http://www.art-c.keio.ac.jp/

E-mail:ac-office@art-c.keio.ac.jp

COPYRIGHT ©2023  
BY KEIO UNIVERSITY ART CENTER

アート・センターでは、講演会、ワークショップなどの催しや研究活動を随時企画しております。詳細についてはセンターHPをご覧ください。



慶應義塾大学  
アート・センター  
KEIO UNIVERSITY ART CENTER